

額田地区小中学校の地域型総合学習単元の歴史と特徴に関する一考察

荻野大輔 (岡崎市立大雨河小学校)
久野弘幸 (愛知教育大学生生活科教育講座)
(2006年10月31日受理)

An Analysis on “Community Oriented Learning” at Nukata-District-Schools in the field of Integrated Studies

Daisuke OGINO (Ooamekawa Elementary School)
Hiroyuki KUNO (Department of Life Environment Studies, Aichi University of Education)

要約 本研究では、「内容系列表」を中心とした「額田教育」「子どもの育ち」「年間指導計画」のモデル図をもとに、生活科及び総合的な学習の時間以前から受け継がれてきている伝統的な単元に注目し、著者自身が行った実践や大雨河小学校の過去の実践や歴史をもとに、旧額田地域の8つの小学校区の単元の特徴や歴史を明らかにする。また、豊富な地域教材をもとにした生活科及び総合的な学習の時間の特色を紹介する。

Keywords : 額田教育, 大雨河小学校, 豊富な地域教材

はじめに

本研究では、内容系列表を中心とし、大きく「額田教育」「子どもの育ち(評価)」「年間指導計画・指導案・授業実践」の3観点に分け、それぞれが内容系列表を経由して相互につながり、また、作用し合うことを確認し、「豊富な教材」と「地域の教育力」を有効に活用し、子どもたちにとって有意義なカリキュラム開発をするものである。(図1参照)

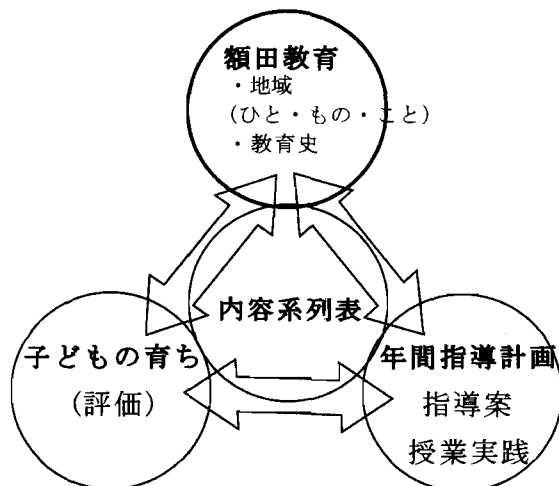


図1：研究モデル図

なお「額田教育」とは、生活科ならびに総合的な学習の時間において、旧額田町における地域教材を背景にした単元による教育活動のことを指す。

1. 研究の意義と目的

平成15年度に前任校岡崎市立夏山小学校(旧額田町立夏山小学校)実践した生活科の単元「牛さんを飼おう」では、子どもたちが前単元の「なつやま探険隊」で見つけた子牛に興味をもち、自分たちで子牛を飼いたいと願い、その願いをもとに自分たちで子牛について調べ行動した結果、実際に子牛を飼い大きな自信をもち、様々な場面で活躍するための原動力とすることができた。また、翌16年度の総合的な学習の時間の単元「みんな大好き!夏山川」では、自分たちの大切にする夏山川をきれいにするためには、自分たちに何ができるであろうか考え、小グループに分かれ、それぞれのグループでテーマを決め追究することができた。追究した結果から自分たちにできることが明確になり、自信を持って夏山川のために活動することができた。また、それと平行し、きれいな夏山川にするにはということから、「ホタルがたくさん飛ぶ夏山川にするために」として、ホタルの生態やホタルが育ちやすい環境を調べ、地区の方々へ発信することができた。

このように、子どもたちにとって身近にあり馴染み深いものを単元化することで、子どもたちの学習意欲をさらに高め、主体的に活動する姿を求めやすいと感じた。そこで、生活科・総合的な学習の時間が実施される以前より脈々と受け継がれてきている「額田教育」を、「豊富な地域教材」と「地域の教育力」を主軸としている旧額田町の小学校8校と中学校1校の現在と過去における実践から、各学校の単元の教材観や地域の方々との関わりについて系統立て特色を明確にする

ことで、生活科・総合的な学習の時間におけるカリキュラム開発を研究の目的とする。また、額田町は市町村合併により平成18年1月1日をもって岡崎市となった。残念なことに地図上から額田という文字が消えることとなったが、「額田教育」の意義を明らかにしておくことは、額田の教育の伝統と歴史を後世に伝えていくといった、歴史的価値があると考えられる。

2. 旧額田町における各学校の生活科・総合的な学習の時間の特色

まず、旧額田町^{*1}について紹介しておきたい。1956年（昭和31年）に形埜村，豊富村，宮崎村，下山村の4カ村が合併し8つの地区からなる旧額田町が誕生した。（図2参照）

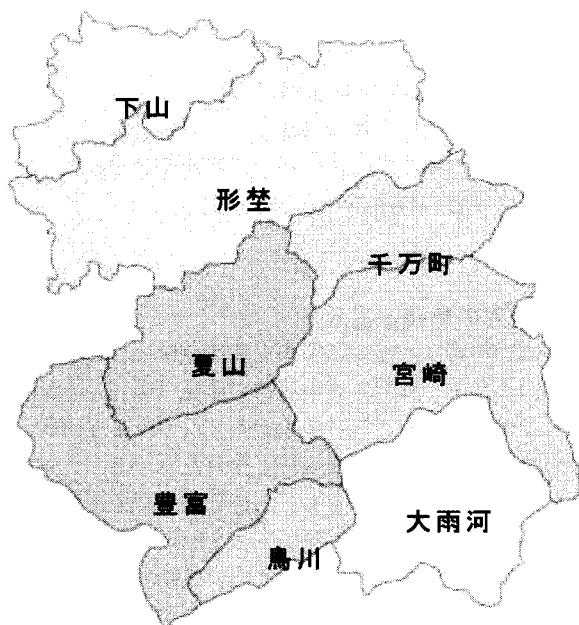


図2：旧額田町の校区

現在は、平成18年1月1日に岡崎市との合併により、岡崎市の東部に位置し、面積の約86%が山林である。また、田畑は約4%で多くは水田として稲作が行われ、畑地では茶，花木，園芸作物などが栽培されている。人口は約1万人程で、農林業で働く人々だけではなく工場や商店，また，他の市町村へ働きに出る人もいる。緑豊かな山々は、標高が300mから800m程で，その中を男川（おとがわ）や乙川（おとがわ）をはじめ多くの清流が流れている。また，それらの川にはアユやホタルが生息している。そのような環境の中，小学校8校と中学校1校はそれぞれの地域の特色を生かし，特色ある教育活動を行っている。

（1）豊富小学校

旧額田町の南部に位置し（図3参照），学区を男川が流れており，その男川沿いには水田が連なっている。学校の北には額田中学校があり，また，西には図書館や額田支所，駐在所，消防署，郵便局などの公共施設

がたくさんある。また，自動車部品の工場を中心とする大きな工業団地があり，近年第二東名高速道路のインターチェンジの建設が予定されている。地区人口約4,500人で現在児童数は287人である。平成15年度に130周年を迎え，

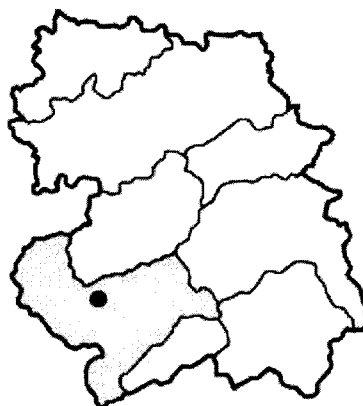


図3：豊富地区

各学年1～2学級で約40人で，旧額田町の小学校の中でも，規模が一番大きな小学校である。「とよとみ学習」で，学校裏にある「豊小の森」や「なかよし広場」，男川の水質検査やいかだ作り，地域の昔の産業に目を向けたカイコの飼育など，地域の自然や人々から体験を通じた学習活動を行っている。

（2）夏山小学校

旧額田町の西部に位置し（図4参照），赤い屋根と時計塔が特徴の校舎のすぐ近くを夏山川が流れており，昨年度創立130周年を迎えた。5つの校区からなり，地区人口約800人で現在児童数は39人である。夏山地区には，夏山八幡宮や仙丸の墓といった重要文化財や寺野の大クスと呼ば

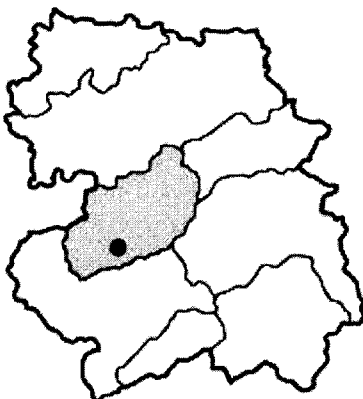


図4：夏山地区

れる県内でも3番目に大きなクスの木がある。また，夏山川をはさむ向かいの山を，子どもたちの学びの場として「夢山」と呼び，そこには，山の斜面や自然を利用したアスレチックなどの遊具や小川を利用したニジマスの養殖池や水車小屋を復元したものがある。子どもたちは，「はかせタイム」で夏山川が三河湾とつながっていることを学習し，三河湾浄化のために，EM（Effective Microorganisms：有用微生物群）菌を使った夏山川の浄化活動に取り組んでいる。また，秋には栽培した水稻を収穫し，復元した水車にて米をつき，全校で水車米を食べるといった，環境教育や食育に力を入れている。さらに，ソニー子ども科学教育プログラムにおいて2年連続優秀賞を受賞している。

（3）鳥川小学校

旧額田町の南部に位置し（図5参照），鳥川川と大原川沿いにあり市境の地区である。季節によってはイ

ノシシヤサル、シカなどが姿を見ることがある旧額田町の中でも特に自然に囲まれたのどかな地域である。地区人口約220人で現在児童数は9人であり、低学年・中学年・高学年といった3学級で構成された複式学級の学校でもある。

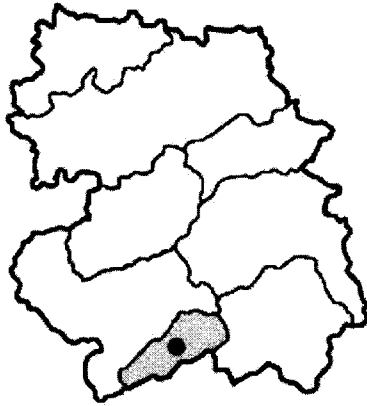


図5：鳥川地区

昨年度創立130周年を迎えた。鳥川小学校では、立地条件を生かしホタルの保護活動に力を入れている。学区の全戸が参加している鳥川ホタル保存会の人たちと共に、鳥川学区全体でのホタル調査を行い、数年間のデータを元に川や水路の浄化活動を行い、ゲンジボタルの観察やエサとなるカワニナの養殖活動を続けている。また、ホタル保存会総会では、「かがやきタイム」で自分たちが調べてきたことを学区の方々に発信している。そして、学区あげての保護活動の成果もあり、現在ではホタルの名所としても有名である。

(4) 宮崎小学校

旧額田町の東部に位置し(図6参照)、旧宮崎村の面影を残す商店街や宮崎診療所、宮崎支所、駐在所、郵便局などの公共施設がある。また、旧額田町の森林組合もあり、林業の中心地となり、間伐や植樹活動も積極的にやっている。地区人口約900人で現在児童数は35人であり、平成16

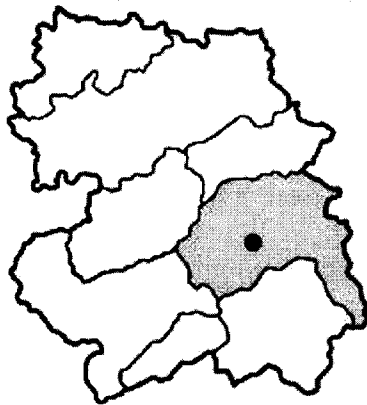


図6：宮崎地区

年度に創立130周年を迎えた。宮崎小学校では、豊かな自然を生かして野生生物保護活動をしたり、学校の山である弘法山を活用して学習を進めたりしている。また、地区の環境がお茶の生産に適しているため茶畑が多くあり、お茶を商品にしている農家もあり、5月には学校の茶畑のお茶つみ、10月には自然観察会などを行い地域ぐるみで活動している。1968年(昭和43年)に、旧宮崎中学校の生徒たちが始めた愛鳥活動を引き継ぎ、「ひのきタイム」において親子探鳥会を行ったり野鳥のための巣箱を設置したりしている。また、愛鳥モデル校に指定されるなど、今なお愛鳥活動を継続している。

(5) 千万町小学校

旧額田町の東部に位置し(図7参照)、標高442mの高さにあり、8つある小学校のうち一番標高の高い場所にある。夏は涼しくて過ごしやすく、冬は寒さが厳しく雪が40cm以上も積もることもある。学区のほぼ中心に小学校があり、東西の二つの集落からなる。また、250年以上受け継がれている千万町神楽や萱葺き屋敷が今なお残る歴史のある地区であり、平成16年度には創立130周年を迎えた。地区人口約200人、現在児童数10人ということもあり、低学年・中学年・高学年といった3学級で構成された複式学級の学校でもある。体育・音楽は全校で行っている。中でも音楽には特に力を入れ、昭和39年から器楽合奏に取り組み、毎年CBC子ども音楽コンクールに出場している。また、全校での「ともえ学習」の時間においては、地区で栽培されている作物や自然環境に注目し、自然薯や古代米の栽培、コンニャク作りをしたり、川の生き物調べや森の生き物調べを行い、こどもエコクラブで他校との交流を行っている。

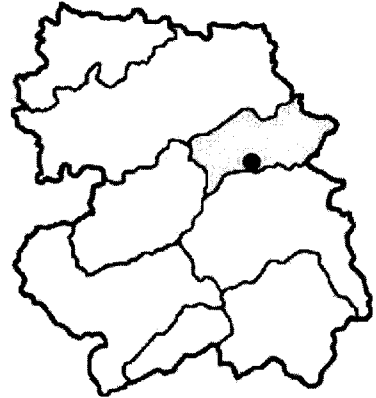


図7：千万町地区

昭和39年から器楽合奏に取り組み、毎年CBC子ども音楽コンクールに出場している。また、全校での「ともえ学習」の時間においては、地区で栽培されている作物や自然環境に注目し、自然薯や古代米の栽培、コンニャク作りをしたり、川の生き物調べや森の生き物調べを行い、こどもエコクラブで他校との交流を行っている。

(6) 形埜小学校

旧額田町の北部に位置し(図8参照)、東西に乙川が流れている。地理的には山が多く、道沿いの平地に集落を形成し、やや広い平地は水田として利用されている。学区の中心には、額田支所、北部診療所、郵便局、保育園などの公共施設が集まっており、旧形埜村の面影を残す商店街もある。地区人口約1,500人、現在児童数は62人で、平成15年度に学校創立130周年を迎えた。教室の壁を取り払うことでオープンスペースを作り、総合的な活動が行いやすくなっている。「木の芽学習」では、カブトムシの飼育を始め、旧額田町の町花でもあったササユリの観察、野鳥の観察、水質保全活動を行っている。水質保全活動では、乙川に生息する天然記念

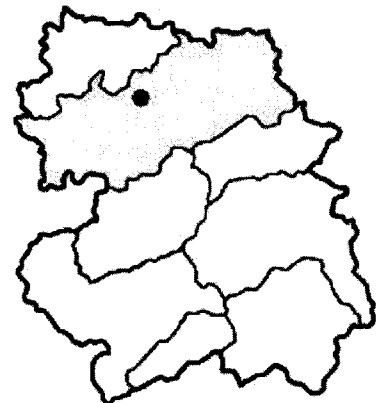


図8：形埜地区

水質保全活動では、乙川に生息する天然記念

物のネコギギの観察や水質調査の結果を「ネコギギ掲示板」に掲示し、地区の方々へ発信している。最近では、平成15年度春・秋花壇設計図コンクールにおいて名古屋市長賞を受賞し、愛・地球博春花壇コンクールにおいて愛知県知事賞を受賞している。花壇作りは地域にも根づき、各地区に花壇が作られ育てられている。

(7) 下山小学校

旧額田町の北部に位置し（図9参照）、駐在所や郵便局、下山支所、保育園などの公共施設が集まっており、旧下山村の面影を残している。下山地区の清流を利用し日本酒の蔵元や明治時代から続く豆腐屋もある。地区人口約800人、現在児童数は37人で昨年度130周年を迎えた。地域の

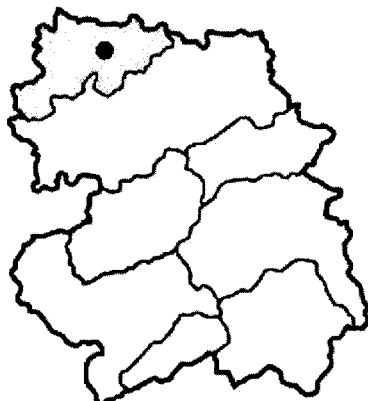


図9：下山地区

自然環境を生かし、「わくわくタイム」において、「ササユリ活動」として旧額田町の町花でもあるササユリを育苗・栽培・保護活動を行っている。また、平成17・18年度環境教育実践モデル事業として、ササユリ数調査、マップづくり、観察記録、種の採取、種まき、球根の植え替え、看板作り、看板立てなどを通じ自然保護の心を育てると共に、ふるさとの下山に対する郷土愛を深める活動を行っている。

(8) 額田中学校

1972年（昭和47年）、町内にあった豊富・宮崎・形埜・下山の4中学校を統合してできた旧額田町で唯一の中学校であり、豊富小学校の北側に位置している。（図3参照）現在生徒数280人である。また、小学校8つの学区から通学することもあり、豊富学区以外の生徒が利用する寄宿舎『敬信寮』がある。月曜日の朝に町内各地より寮へ来て、週末には自宅へ帰る生活をしている。寮を持つ中学校は全国でも珍しく、現在寮生数104人が、一週間生活を共にしている。8つある小学校で学んできたことをもとに、環境問題や福祉問題に取り組んでいる。年2回、地域の方を講師として招く「土曜講座」を開催したり、地域と協力して「アルミ缶回収活動」を行ったりしている。昨年度行われた額田町環境保全の集いでは、「ふるさとの自然を守りみんなのために貢献しよう」のテーマのもと、額田町の森林を守る「山講座」と男川の水質調査を行う「水講座」に分かれたそれぞれの活動報告をし、山と水の密接な関係について地域の方々へ発信することができた。

3. 額田教育の価値についての考察

(1) 大雨河小学校の実践からの考察

①大雨河小学校について

旧額田町の南部に位置し（図10参照）、大代・雨山・東河原（旧河原）といった三つの集落からなっている。そして、雨山から流れる雨山川・大代を流れる乙女川・東河原から流れる河原川の三つの川が集まった場所に小学校が建っている。地区人口約400人、現在児童数13人で、低学年・中学年・高学年といった3学級で構成された複式学級の学校でもある。平成16年度には創立130周年を迎えた。校名・地区名にもなっている「大雨河」は、各集落名から一文字ずつをとってつけられた。また、正門に架かる橋や全校総合学習の名前にも使われている「みつわ」*2（三和）という言葉は、三つの集落の思いである「三つ和の精神」を象徴し、小学校の完成時に、学校へ渡るための永久橋が架かったことから、三つの学区民こぞって選んだ名前であり、長年の願いが込められている。この地区に小学校を作る際の、地域の方々の思いを感じることができる。スギやヒノキを植林した山が多く、林業で暮らしを立ててきた歴史があり、また、川沿いに田んぼや畑・家がありササユリが咲いたりホテルが舞い飛ぶ里山の風景が残っている。

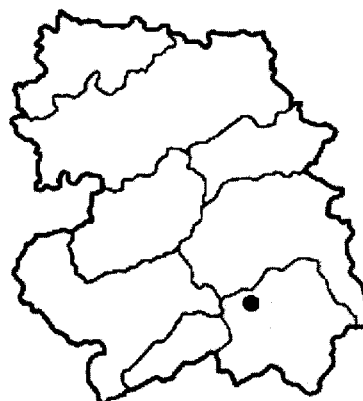


図10：大雨河地区

②生活科・総合的な学習の時間の単元構想

本校は、学区に林業で生計を立ててきた家庭が多いことから、地域の自然について知識の深い方が多く、学区の自然環境を教材として単元を作る際には、講師となっただけの方が非常に多くみえる。また、中には「子どもたちに本物を。」と言い、積極的に働きかけてくださる方もみえる。そのような地区の方々の協力を得て、「学級ふるさと総合学習」と「全校みつわ総合学習」の二つの学習活動を連携させている。生活科では、総合的な学習の時間である全校みつわ総合学習の単元を共有できる部分で活動し、各学年での追究の場と全校での追究の場を融合させて取り組んでいる*3。（図11参照）

「学級ふるさと総合学習」では、主として学級の子どもの発想やアイデアにもとづいて、個性と持ち味を生かした学級独自の追究の時間としている。そして、「全校みつわ総合学習」では、地域と小規模校の特性を生かして全校縦割り班で地域の自然とふれ合う

	低 学 年	中 学 年	高 学 年
学 級 分 隔 さ と 総 合 学 習	<ul style="list-style-type: none"> ・ どうぶつランドをつくろう！ ・ きせつをたべよう！ ・ むかしのおもちゃであそぼう！ <p>○あそぼう！たべよう！そだてよう！</p> <p>(1・2年生 生活科)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 田んぼ大臣とお茶博士になろう！ <p>○田んぼやお茶について調べよう</p> <p>(3・4年生)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 自分たちの活動を地域の方やホームページで発信しよう！ <p>○大雨河の環境活動を全国へ発信しよう！</p> <p>パートⅢ</p>
	<ul style="list-style-type: none"> ・ 野菜を栽培して収穫を喜ぼう 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 廃油粉石けんを作ろう ・ 省エネ学習をしよう 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 川の生き物の調査活動しよう ・ 炭作りを体験しよう

図11：今年度の生活科・総合的な学習の時間での取り組み

追究活動として位置づけている。本校にあるみつわ古墳公園や水車小屋、ログハウスなどは、子どもたちの活動の結果から生まれたものである。また、地域の方々やその道の専門の方にご協力頂き本格的なものを作ることができた。みつわ古墳公園作りは、平成11年度^{※4}に5・6年生の教室に飛び込んで来た小鳥から話が始まった。あいにく窓ガラスにあたって死んでしまった小鳥を、もともと興味があった古代の古墳風にお墓を作ってあげたいという願いを大切にされたものであった。地域の方をはじめ下山地区の石屋の方の協

力も得て、中に石室を持つみつわ古墳が完成した。(写真1参照)



写真1：みつわ古墳の石室から

埴輪をかざりみつわ古墳公園とし、今でも全校児童の憩いの場となっている。平成14年度^{※5}には、全校の憩いの場を作りたいという子どもの願いが、間伐材の利用について学んだことと結びつき、ログハウス公園づくりを考えた。間伐材を利用して作ったログハウスに住み、実際に生活している方へ取材をし、子どもたちは夢をより強いものにしていった。子どもたちの調べ学習やログハウス建設にかける思いを受けた地域の方々をはじめ、保護者、森林組合の方々、額田町夢を広げる学校作り事業の支援等々があり、学校の片隅に間伐材を使った本格的ログハウスを作り上げることができた。(写真2参照)



写真2：ログハウスの前で

平成15年度^{※6}には、地域を調べる中で子どもたちは、昭和20年代に大雨河地区の生活に根付いていた水車に目を付けた。「昔の人の生活の知恵を学ぼう」と「米つきのできる本格的な水車を作りたい」という願いから、水車大工の方に弟子入りをして修行を行ったり、地域の社会人講師の方が推薦するこだわりの木組みの匠の技と生活の知恵を学ぶことができた。釘を一本も使わないその技術には、子どもたちは目を輝かせ

ていた。全校で完成を喜んだ水車では，今なお収穫した米をつき，その米を給食で水車米として全校で味わっている。(写真3参照)



写真3：匠の技の結晶の水車

いずれの実践においても大切なのは，できあがった建造物の立派さといったことではなく，自分の思いに対して取り組む追究の過程で，どのような子ども同士の学び合いがあり，どんな思いや考えが，この子らの内側に生まれたかということであると考える。「学級ふるさと総合学習」で膨らんだ思いを全校に発信し「全校みつわ総合学習」において全校の思いを形作っていくことは，小規模校である本校にあった学習スタイルであると考えます。

(2) 生活科・総合的な学習の時間以前の研究構想からの考察

ここで，昭和56年度の研究紀要*7である『現職教育の歩み 地域教材を生かして』から当時の研究構想を取り上げ考察したい。毎年様々な取り組みを研究している中で，この年は『本校は昔から地域と学校教育の結びつきが強い。こうした条件・環境の地でこそ，子どもの意識を大切にできる授業が可能であり，行われなければならないと思う。そして，この地域の人々の願いがこもっている素材をもとにして，子どもを育てる授業の中心となるものが，社会科であると思う。こうした考えにより，地域素材を掘り起こし教材料しようと努めている。』としている。社会科の学習活動を通して「子どもの自己実現」をめざして研究がなされ，その研究構想において，「学級ふるさと総合学習」と「全校みつわ総合学習」のもととなる活動を見ることが出来る。(図12参照)

社会科の実践を主軸に置き，特別活動として位置づけられた「みつわタイム」の内容を「稲作・畑作・シイタケ作り・創作活動」といった，まさに現在の「全校みつわ総合学習」にあたりと考えられる。さらに，各教科および道徳を「楽しい授業構成」として位置づけており，内容を「地域素材の掘り起こし・ひとりひとりの考えと座席表」としている。これはまさに

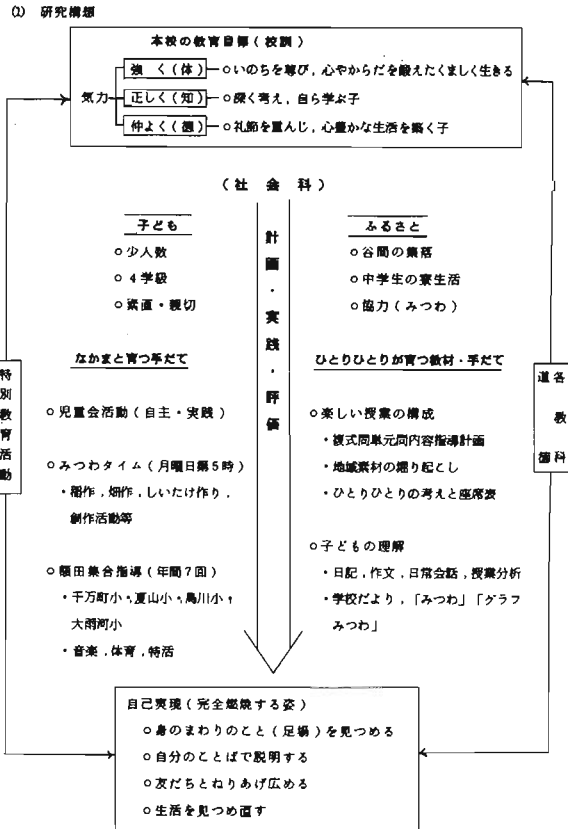


図12：昭和56年の研究構想

「学級ふるさと総合学習」と考えることができる。ここにおいても，子どもの思いを達成させる手段としての地域教材発掘の重要性や小規模校の特性としての子ども一人一人への深いとらえを重要視し，座席表を活用し子どもの思いをとらえようとしている。

おわりに

近年，8つの小学校は創立130周年を迎えている。由緒ある歴史の中で，地域と密接に関連し地域の教育力を得ることで，伝統ある額田教育を育むことができたと考える。いずれの学校においても，地域教材を総合的な学習の時間の中核とし，それぞれの地域の特性に合わせた教材開発がなされ，子どもたちの生き生きとした学習活動の姿を見ることが出来る。

生活科・総合的な学習の実践の質が問われている今日，地域との密接な関わり合いと積極的な地域教材の開発・実践は，子どもの思いを大切にし，その願いを実現するための大きな宝であると考えます。また，発表者自身が生まれも育ちも旧額田町であり，旧額田町の大雨河小学校に勤務していることは，自分自身の子ども時代の経験と成長過程を教材研究の材料としていくことができ，額田地域における教材の魅力を引き出すことができると考えている。今後は，今年度の自分自身の取り組んでいる実践と他学年の実践についてまとめ分析・考察し，実用的かつ弾力的な年間指導計画・

指導案を作成したい。そして、実際の子どもたちの成長する姿と照らし合わせ、その成長する姿を読み取ることができる内容系列表の作成にもあたりたい。

〈主な参考文献〉

※1

著者名：額田町教育委員会（現岡崎市教育委員会）
刊行書名：ふるさと読本『ぬかた』第3版
印刷所：共和印刷株式会社
発行年：2002年3月1日発行

※2

発行者：額田町（現岡崎市）
編集者：大雨河小学校開校百周年記念事業
実行委員会百周年誌編集委員会
刊行書名：額田町小中学校100周年記念誌
印刷所：本多印刷株式会社

※3

発行者：大雨河小学校
刊行書名：平成18年度 大雨河小学校学校経営案

※4

発行者：大雨河小学校現職教育委員会
刊行書名：平成11年度 現職教育記録
『学ぶ喜びが生まれるとき』
— 地域と小規模校の特性が生きる —

※5

発行者：大雨河小学校現職教育委員会
刊行書名：平成14年度 現職教育記録
『学ぶ喜びが生まれるとき』
— ふるさと大雨河に根ざし、
自分の考えを出し切ることで
みんなが育つ授業の探求 —

※6

発行者：大雨河小学校現職教育委員会
刊行書名：平成15年度 現職教育記録
『学ぶ喜びが生まれるとき』
— ふるさと大雨河に根ざし、
自分の考えを出し切ることで
みんなが育つ授業の探求 —

※7

発行者：大雨河小学校現職教育委員会
刊行書名：昭和56年度 現職教育の歩み
『地域教材を生かして』